



ピースあいち 第4回寄贈品展 —市民から寄せられた300点—

開催期間 2016年12月6日(火)～2017年1月14日(土)

休館日 日曜日、月曜日、年末年始12/24～1/4

開館時間 午前11時～午後4時

「ピースあいち」では開館以来市民の皆さんから戦時下の資料のご寄贈をいただいております。これまでの寄贈資料は約2,100点となりました。内訳は物資資料が1,500点、文書資料が600点です。

今回は、2013年8月から2014年12月までに47名の方から寄贈いただいた約310点を、＜軍隊生活＞ ＜国民生活＞ ＜本＞ ＜地図＞ ＜写真＞ ＜郵便・新聞＞ ＜その他＞ の7種類に分類して展示します。

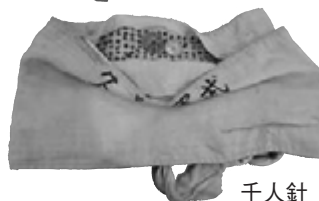
戦時下に発行された中国や世界の各種の地図をまとめてご寄贈いただいた方、軍人であったお父さんが軍隊生活のなかで使っていた衣服や各種の書類を、あるいは戦中から戦後にかけての「中央公論」をまとめてご寄贈いただいた方もあります。お一人で50点や80点もの多くの寄贈をいただいた方もあります。「千人針」と「あたらしい憲法のはなし」はすでに常設展で展示させていた



一目でわかる漫画世界現状地図



軍服



千人針



中央公論
(大正16年 新年號)

だいています。

今回は約310点という点数で見ごたえもあります。戦争中の品々を直にご覧いただき、戦争の実態に触れる機会となりますよう期待しています。

「戦争の中の子どもたち」展

2017年1月17日(火)～2月4日(土)

2011年の夏に企画展として開催して以来、毎年、準常設展として開いている恒例催事です。「ピースあいち」が所蔵する実物資料やパネルを通して、戦時下の子どもたちのくらしや学校の様子を紹介しています。子どもたちの生活の中にまで戦争が忍び寄り、戦争に協力させられていく恐ろしさを読み取っていただきたいと思います。

展示は毎年、少しずつ替えています。今年は国民学

校5年生の女の子が描いた「行事の画帖」と国民学校1年生の男の子が描いた絵、そしてその子が2年になった時の夏休みの絵日記です。女の子の絵ではいろいろの行事が戦争一色になってしまう日常が描かれています。男の子の絵には日の丸がついた飛行機や兵隊さんが多く描かれており、出征兵士を見送る絵もあることから、子どもにとっても戦争が身近なものだったことがうかがえます。



昨年の展示と展示ガイドの様子

企画展

丸木位里・俊「原爆の図」と市民が描いた「原爆の絵」

2017年2月14日(火)～3月25日(土)



本展は、丸木位里・俊の「原爆の図」と広島市民が描いた「原爆の絵」による展覧会です。

原爆の図はこれまで「ピースあいち」に来ていない初期3部作のうち第1部《幽霊》です。「ピースあいち」での原爆の図展は3回目、5作目になります。

〔《幽霊》詞書より〕それは幽霊の行列／一瞬にして着物は燃え落ち／手や顔や胸はふくれて、／紫色の水ぶくれはやがて破れて、／皮膚はぼろのようにたれさがった。

日本画の丸木位里、洋画の丸木俊の共同制作である「原爆の図」に対し、「原爆の絵」は広島原爆の体験にもとづいて市民が描いた絵です。1974、1975年(被爆30年)と2002年(被爆50年)の2回で募集され、広島平和記念資料館が所蔵する「原爆の絵」の中から、「ヒロシマを語り継ぐ」というタイトルの29枚の絵(複製パネル)を展示します。

これらの絵は広島記憶であり、証言でもあります。広島でどんな体験をしたのか、被爆者がどのような思いで絵を描いたのか、多くの皆さんに観ていただきたいと思います。



(上)「原爆の図」第1部《幽霊》(1950年) 屏風四曲一双、縦1.8m×横7.2m
(下)「助けてあげられなくてごめんなさい」(8月6日午前10時30分頃 段原国民学校、加藤義典)

「ピースあいち」過去の原爆の図展

- 第1回 2012年7月～8月、第5部《少年少女》、第12部《どうろう流し》
第2回 2016年3月～5月、第4部《虹》、第8部《救出》

10周年記念事業の準備が進む

「ピースあいち」は来年の5月4日で開館10周年を迎えます。記念の年にあたり、10周年記念行事・事業・企画を計画しています。

1. 「ピースあいち開館10周年記念誌」を作ります。

また5月14日に、「ピースあいち」にて記念式典を行い、その後、池下にあるホテルプラ王山で懇親記念パーティーを開きます。

「ピースあいち」3F展示室では、「ピースあいち10年のあゆみ」展(4/11～5/20)を予定。ピースあいち開館までの運動、加藤たづさんとの出会い、開館準備の日々、そして開館から10年の歩みについて、写真や新聞記事などの資料を展示します。

2. 10周年の企画展としては、「丸木位里・俊の原爆の図と市民が描いた原爆の絵」展(2/14～3/25)を皮切りに、「名古屋城が焼失した5月 名古屋大空襲」展(4/11～5/20)、「知られざる沖縄の真実—ハ

ンセン病患者の沖縄戦」展(5/30～7/1)、そして「いわさきちひろ展—世界中の子どもに平和としあわせを—」(7/11～8/31)の準備をしています。

3. 平和についての意見・提案を広く募集して、今後の「ピースあいち」の活動に反映していくとともに、応募された意見は冊子にまとめて、多くの人たちと共有していく企画をすすめています。

4. また、館を補修し、使い勝手を良くする検討が始まりました。この10年間で生じた赤字も補い、これからの10年の活動にそなえる資金をつくるため「10周年記念募金」を広く呼びかけ、ご支援を仰ぐことになりました。

これら活動を通して、「ピースあいち」を支えてくださる人々の輪を一層大きなものにしていきたいと思ひます。

2016年度上半期・「語り手の会」の活動

本年度上半期(4～9月末)の戦争体験語り事業は、
①愛知県・名古屋市から依頼を受けて、県下の小・中
学校へ語り手を派遣する平和学習支援事業 ②夏
(8月)の戦争体験語りシリーズ ③「ピースあいち」へ
来館した団体への語り事業の三つの柱のほかに、新
たに8月、昨年開館した「愛知・名古屋戦争に関する資
料館」へ語り手を派遣する事業を実施しました。

これらの活動で、語っていただいた語り手は延べ43
人、聞いていただいた聴衆は1700人余に上りました。

今年の夏の語りシリーズでは、四日市市在住の萩原
量吉さん(75歳)に戦後東山動物園で生き残った象の
背中に乗った体験を語っていただきました。また、「愛
知・名古屋戦争に関する資料館」での語り事業では、
各務原市在住の水谷哲也さん(93歳)が兵器工場へ
の徴用と中国戦線への派遣で胸部貫通銃創にあった
体験を語られました。

平和学習支援事業では、石原隆さん(90歳)が語っ
た「広島での原爆被爆体験」を聞いた名古屋市立汐
路中学校2年生の生徒が、次のような感想を書いてく
れました。

『人の中で争いが起きてしまうのは、本当につらい
ことで、情けないことです。もっと一人ひとりが強い
心を持ち続けることが大切だと思いました。時代が
変わるにつれて、体験者の方に話を聞く機会がなくな
っている今だからこそ、私たち若い世代が次の世
代へ語り続けなければいけないと思います。「絶対
に忘れてはいけない」と「二度としてはいけない」と
伝えていき、「今の平和」をもっと大切にしていきたい
と思います。』

こうした子どもたちの思いを知って、語り手たちは元
氣と勇気をいただいています。



貴重な戦時遺品が「ピースあいち」へ

「ピースあいち」には開館以来、市民の皆さんから
戦時下の軍隊・国民生活用品のご寄贈があります。
2016年も28の個人・団体から221点(11月5日現在)の
寄贈がありました。沖縄県の南風原文化センターから
30点の申し出があり、また個人が持っておられた歴史
的な資料など多数の寄贈がありました。

戦後71年が経過し、寄贈品の持ち主がご子息やお
孫さんに代わってきていますが、「有効に役立ててほし
い」という強い願いや気持ち伝わってきます。これら
一つひとつの寄贈品から、戦争の実態を垣間見ること
ができます。これからも事実の把握に努め、広く市民の
皆様に展示させていただきたいと思います。



軍長靴(沖縄津嘉山北
地区旧日本軍壕出土品)



「婦人倶楽部」附録(昭和12
年版毛糸編み物大全集)



「ふしぎなたいこ」(あかまつ
としこ絵)



防空に対する各家庭
平常の準備

平和へのメッセージ

2016年夏 戦争体験語りシリーズから

毎年恒例の「戦争体験語りシリーズ」が8月2日(火)～14日(日)、「ピースあいち」で開催され、「ピースあいち語り手の会」の方たちが日替わりで来館者のみなさんにお話をしました。(ボランティアが書いた原稿を編集しました。年齢は2016年8月1日時点)

8月2日(火)

橋本克己さん(80歳) 「満州開拓団」 満州で戦災孤児となる

昭和17年満州開拓団として一家8人、新城から満州に渡りました。寒冷地で開拓、穀物を作り、牛馬を育てました。これで平和に暮らせると思った頃、戦争が勃発。父も召集されました。8月15日を迎えました。午前中までは日本が生殺与奪の権を握っていましたが、午後から逆転。積年の恨みからか、現地の人々が暴走。日夜部落が襲われました。家畜から金品まで奪われ、抵抗すれば射殺。そこで治安のいいチチハルへ逃げましたが、今度は伝染病が待っていました。私は収容所で家族を皆失い、戦災孤児となりました。わずか10歳ながら一人で帰国しました。



8月3日(水)

江本繪門さん(79歳) 「空襲と学童疎開」 「ヒモジイ、サミシイ、カユイ」思ひ出

昭和18年国民学校入学、このころはもっぱら絵ばかり描いていました。南方の戦地の兵隊さんに送った絵に対して11月に丁寧な返事が送られてきました。2年生のときに鶴舞公園の近くから覚王山近くの学校に転校しました。昭和20年、3年生になったばかりの私たちは長良川の上流の小さな町のお寺に学童疎開をしました。初めて親元を離れて暮らすことになり、一人が泣き出すと、低学年の私たちが、皆一斉に声を出して泣き出しました。シラミには悩まされました。その頃は「ヒモジイ、サミシイ、カユイ」の思いがとても強かったです。



8月4日(木)

中野見夫さん(77歳) 「熱田空襲体験」

今でも脳裏に残っている子どもの死

昭和14年熱田区六番町で生まれ、育ちました。当時、実家の専光寺の境内は遺体の安置所となっていました。昭和20年6月の熱田空襲では、42機のB29が8分間爆撃し、2068名が死亡しました。遺体が寺に運ばれてきました。背中に大きな穴があいている人、「水、水」とうめきながら死んでいった人。見た目は無傷な母の遺体の横にいた上半身のない赤ちゃんの姿は、今でも脳裏に焼き付いています。戦争とはむごいものです。そして、亡くなった人たちにしてあげられることは、そのことを忘れないこと。それが一番大事であると思います。



8月6日(土)

木下富枝さん(80歳) 「広島での被爆体験」 ピカに被爆

昭和20年8月6日、国民学校3年の時でした。爆心地から1.2kmの自宅で被爆しました。

窓から入ってきた閃光と爆風で、自宅に爆弾が落ちたと思いました。外に出ると周囲の家はことごとく潰れていました。姉は背中に大火傷を負いましたが、皆で避難しました。途中、黒い雨に遭いました。避難先の庭では建物疎開の作業をしていた学生達が被爆で焼け爛れた体を横たえ、「水を」と訴えるその姿はお化けのようで恐ろしかった。父は水を飲ませてあげたが、皆次々に息絶えていきました。小川で水を飲もうとすると、たくさんの遺体が浮いていました。



8月7日(日)

田邊登志夫さん(88歳) 「軍隊生活」 軍隊は理不尽な場

昭和19年6月、15歳で海軍に入隊しました。私だけではなく、友達も少年兵を志願できる年齢になると、次々と受験しました。軍隊に入ることには何の疑問も持たなかったのは、国の政策としての教育の成果と言えます。3か月の厳しい新兵教育を受け、軍隊というところは、人間的な感情を持っていたらやっていけない理不尽な場であることを知りました。その後、飛行整備予科練習生として配属されました。特攻隊に出される人を見送ることもありました。戦争は二度とやってはいけない、武器をもたないことが最大の武器になるのだと、訴え続けていきます。



8月9日(火)

望月菊枝さん(86歳) 「勤労働員・空襲体験」
女学校で空襲を受けた

当時、第三高等女学校の生徒で、兵器工場で働いていましたが、空襲の標的になるので、学校の校舎を使って飛行機部品を作っていました。校庭には幾つもの防空壕がありました。逃げ込んだ壕から外を見ると、近くの壕が大きな穴に変わっていて、そこから人の腕が飛び出ていました。まわりの町並は消えていました。その直後の記憶は今もありません。帰宅途中、真っ暗な道でだれかが「助かったのか」と声をかけてくれたこと。その時、はじめて涙ができました。ひもじい思いをしながらも「勝つまでは」とがんばっていたのに敗戦。15歳の少女でした。



8月10日(水)

河村廣康さん(92歳) 「シベリア抑留」
飢えと寒さと重労働に苦しむ

関東軍の戦車部隊に所属し、満州の奉天で終戦を迎えました。その時、生きて日本へ帰れると思いましたが、しかし、ソ連軍に連れて行かれたのはシベリアの収容所でした。抑留生活の大変さは真冬の気温が零下50度になることもある厳寒の地の重労働と飢餓でした。食事は小さなパンとキャベツが2切れ入った塩味のスープ。毎日、腹と背中がくっつくような感覚でした。ヘビやカエル、野草を食べました。飢えと寒さと重労働で多くの戦友が亡くなっていきました。戦後71年たっても、23歳のままシベリアに眠っている戦友のことが、気にかかっています。



8月11日(木)

中野 巖さん(88歳) 「軍隊生活」
おまえたちの命は鳥の羽より軽い

昭和19年9月、16歳で志願して海軍予科練習生となり、相模野海軍練習航空隊に入隊しました。最初に言われたのは「おまえたちの命は鳥の羽より軽い物である」ということでした。毎日、理由らしい理由もなく殴られました。今は憲法で基本的人権が保障されていますが、当時はそんなものではなく、特に軍隊では人権など微塵もありませんでした。人権を尊重しては、敵兵を殺すことはできません。人権をないがしろにすることで、人を殺す垣根を低くしていました。暴力による支配と命令に対する絶対服従で人間を一つの型にはめ込んでいきました。



8月12日(金)

萩原量吉さん(75歳) 「遠足で象に乗った」
象の背中では硬かった

昭和24年、私が津の小学校3年生の時に、東山動物園に遠足に行きました。食べ物がなく、お腹がすいて楽しさほとんどなかった子どもたちにとって、象を見る遠足は楽しみでした。選ばれて象の背中に乗せてもらいました。象の背中では本当に高く、背中の毛がとても硬く、お尻が痛かったことを今も忘れることができません。生き残った象の事実が「ぞうれっしゃがやってきた」という絵本、合唱として全国に広まっていきました。私はそれによって、自分が象に乗ったことを知ったのです。象や動物たちを殺すような戦争が起きないことを願って体験を語り続けます。



8月13日(土)

筧 久江さん(84歳) 「勤労働員・空襲体験」
学友が42人亡くなった

昭和19年、学区制になり、東片端の第三高等女学校に入学しました。私たちは勤労働員に行くことになりました。三菱電機で戦闘機の部品をつくりました。年が明け校長先生が軍需工場は危ないので、校舎を工場にするように提案し、学校は工場になりました。校庭には1・2年400人くらい入れる防空壕が幾つも造られましたが、直撃を受けたらひとたまりもないものでした。1月23日の空襲で防空壕に穴があき、42人が亡くなりました。3月の名古屋空襲で学校が燃えました。私は、中津川の落合川沿いにあった村の小学校の工場へ勤労働員され、そこで終戦を迎えました。



8月14日(日)

平田和香さん(75歳) 「満蒙開拓団の調査研究」
国策で行われた満蒙開拓

満蒙開拓団は昭和21年に引き揚げが始まったので、今年は70年となります。世界恐慌で農家の蚕業も打撃を受け、「生めよ増やせよ」との国策も相成り、国はとくに生活が苦しい農村から満州に27万人を送り込むこととしました。満州国の広大な土地をもらえるという触れ込みで渡った開拓団が手にした満州の土地は、実際は88パーセントは中国人が耕した土地を取り上げたものでした。終戦とともにその地を追い出され、逃げまどいながら、開拓団の人々は実は自分たちが加害者であったと知ったのです。逃げ惑い極寒の中、命を落とす者も多かったのです。



感動を与えた「私の八月十五日展」

7月19日(火)～8月31日(水)

漫画家や著名人が、1945年8月15日をどんな気持ちで迎えたかを漫画と短文で証言した「私の八月十五日展」が開催されました。TVや新聞で報道されたこともあって期間中に2200名を超える入場者がありました。1～2時間もかけて、じっくり観ていかれる方が沢山いらっしゃいました。子どもも漫画を見て「よくわかる」と言っていました。

7月31日には「八月十五日の会」の代表理事である森田拳次さんがお話をしてくださいました。6歳まで暮らした満州での生活と引き揚げの苦労話。罵倒されるのを覚悟で南京で展覧会を開いた話等々でした。満州で暮らした漫画家は赤塚不二夫「天才バカボン」、古谷三敏「ダメおやじ」、北見けんいち「釣りバカ日誌」、私の「丸出だめ夫」などバカとダメの作品が多い、そこに満州時代の心象の投影があるのかもしれないという話も印象に残りました。



○鑑賞された方の感想から
(一部文章を短くしてあります。)

興味深く、また重い気持ちで拝見しました。極限の戦地ラバウルで、その日を迎えた水木しげるさんの絵と言葉には圧倒的な重みがありました。(37歳男)

敗戦の日は9歳でした。両親は涙を流して戦争に負けたといっていました。私は部屋中をとびまわって大喜びでした。おさな心にもどれだけ空襲の怖さがあったのかと思います。母がこれからイバラの道だよと云っていたのをおぼえています。(79歳女)

私の八月十五日は学童疎開先のお寺でした。「ああこれで家に帰れる」と思いました。(83歳男)

とても良かったです。挿絵と文章の組み合わせで、小学生の子どもにもわかり易いと思い来館しました。赤塚さんの違う面に出会った気がしました。(45歳女)

昭和19年 国民学校5年生が描いた 戦時下における『行事の画帖』

9月27日(火)～2017年2月4日(水)

今秋開催された「戦争の中
の子どもたち」展の一環として、
戦時下の小学生によって描か
れた全22枚の絵(一部複製パネ
ル。各務原ユネスコ協会提供)
が2階プチギャラリーで展示さ
れて好評を得ました。1944年
(昭和19年)に岐阜県各務原
市鵜沼国民学校5年女子組の
子どもたちが描いた『行事の画
帖』です。当時の子どもらの学
校生活や暮らしが戦争一色に
塗り込まれていた様子が伝

わってくる絵でした。

それぞれの絵には担任訓導
(教諭)であった石井(旧姓中
村)先生による解説文が添えら
れていましたが、新任の女子
先生がどんな気持ちで生徒た
ちに絵を描かせておられたの
か?について想いを馳せさせ
られる作品でした。

(*この展示は「ピースあいち」のあ
るボランティアの小学校6年生時の
担任の加藤和夫先生が各務原ユネ
スコ協会の事務局をしておられる縁
で実現したものでした。)



15歳の語り継ぐ戦争

一金城学院中学生の壁新聞と平和かるたー

7月19日(火)～8月31日(水)

「ピースあいち」開館の2007年から、毎年夏に展示されている金城学院中学生の壁新聞。修学旅行で訪れた町・広島をコース別で学習し、語り部の方たちのお話をしっかり受け止め、今度は自分たちが平和の発信源となる一平和をつくる者として歩み出していく…そんな思いが込められた壁新聞と平和かるたが今年も2階のプチギャラリーに並びました。



●来館者アンケートより

私は金城学院卒業生です。10年ほど前に自分も作った「平和新聞」が現在も続いていて、今日見る事ができて嬉しかったです。私は、社会科の教員です。平和への道を考えることができる子どもたちを育てたいと思い、教員になろうと思いました。実際の教育現場では、そんなことを考える暇もない程、大変ですが、何とか、過去から「今」を考えることができる子どもを育てたいと思います。



初めてのギャラリートーク

peace nine2016巡回展

9月6日(火)～9月24日(土)



名古屋芸術大学の皆さんによる平和をテーマに創作した芸術展は、「ピースあいち」で毎年9月に開かれ5回目になり、絵画や造形の多彩な24点が展示されました。出展者は17名の学生や卒業生、教授らです。9月13日(火)には制作意図や平和への思いを語るギャラリートークを行いました。小さな数個の赤青白のキューブを並べ戦禍を表現した学生は「戦争のことを学ぶのは苦手だったが、自分なりに残酷さを出さずに戦争体験を描こうと試みた。体験者がいなくなったら自分は子どもに伝えられるだろうか?」と不安を口にしました。2007年に大学で始まったpeace nine展の初回

から参加する西村正幸先生は、ブルーを基調にした3枚の絵の前で「昔も今も子どもや女性、お年寄りなど戦争や紛争で犠牲になるのはいつも弱い人たち。そのことへの怒りと悲しみがテーマ。」と語りかけました。

世代の異なるそれぞれの視座が表現するアートはたいへん興味深いものでした。

胸にしみる歌声

ピースコンサート 1階交流広場にて

9月10日(土)



名古屋二期会アンサンブル研究会が、今年も本格的なオペラと日本の歌など全19曲を歌いました。分かりやすく楽しく、人生の味わいあり、そしてジーンと胸にしみる歌声に、客席ではハンカチを目に当てる人もおられ、感動のコンサートでした。

資料館探訪 17

学校の中にある第一次光州(クワンジュ)事件の記念館

1929年11月に起きた第一次光州事件は、列車の中で日本人中学生が朝鮮人女学生をからかったことが発端で、朝鮮全土を巻き込む独立運動になり、運動は1930年3月に鎮圧された。その事件の記録を残したものが『光州学生独立運動記念歴史館』で、光

州第一高等学校の敷地内にある。

記念館は2階建てで、当時の様子がわかる写真や資料が展示されている。ハングルでしか説明がないので、詳しいことはわからないが、日本の朝鮮支配と光州事件の内容が朝鮮人の視点から展示されている。

運動に参加した一人一人の写真が壁から天井まで張り付けてあるのには圧倒される。朝鮮総督府が発行した『中等教育公民教科書』も展示されていた。

外には記念塔がある。塔は炎の形(高さ39M)をした立石群で形成されている。左右に学生の群像があり、さらにレリーフがおかれている。(光州には1980年に起きた第二次光州事件の記念碑や資料館がある。)

(N)



資料館の前にあるモニュメント



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

ぜひ「ピースあいち」の会員に!

2017年はピースあいち開館10周年の記念の年となります。記念レセプションや懇親パーティ、特別企画展、記念誌の発行、記念募金、意見募集など、多くの計画をたて、準備に入っています。

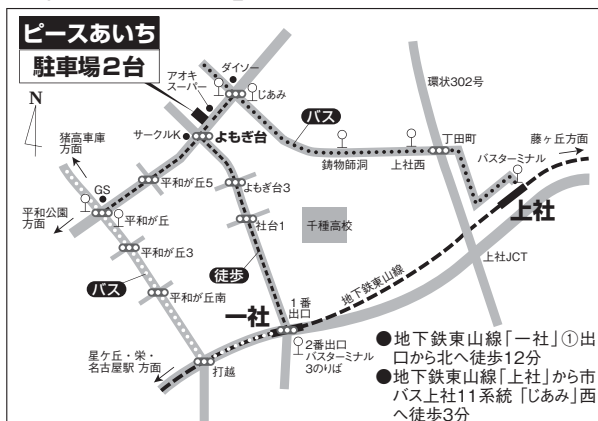
「ピースあいち」の基本財源は、入館料(大人300円・子ども100円)と会員の皆さんの年会費(正会員6000円・賛助会員3000円)です。来館者数は、開館した2007年は約12,000人、以後は6,000人前後で推移してきました。

現在会員数は953名(正会員346名・賛助会員607名)ですが、「ピースあいち」の年間経費約1,280万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼っているのが現状です。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・年末年始
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階の「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示。ほかにも準常設展示として「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

「ピースあいち」への交通のご案内



●編集後記●

当館は、来年5月に設立10周年を迎える。10周年記念誌の編纂をはじめ幾つかの記念事業を予定している。設立当初は手探りの状態で、当面の仕事をこなすだけで精いっぱいだった。それが試行錯誤を重ねるなかで、なんとか長期的な計画を立てることができるようになった。「継続こそ、力なり」である。

私たちの運動が評価され、愛知県から市内・県下の小中学校での平和授業に「語り手」を派遣する委託事業が舞い込んできた。また、県教育委員会は当館を博物館相当施設に認定した。インターネットでのPRも行き届き、全国に知られるようになった。あとは財政的基盤の確立、安定である。私たちの運動はまだ続く。

(S)